

# マスコミ

昨年、小欄の冒頭で触れた「ファースト」はさらに、フランス、ドイツ、オーストリアのみならず欧州、オーストラリアでも広がった一年である。その流れの中で「フェイク(偽)ニュース」が吹き荒れている。

藤代裕之『ネットメディア覇権戦争(光文社新書)』がそれは突然に生まれたわけではなく、ビジネスとジャーナリズムの間で揺れ動くビジネスパーソンの戦いの歴史であり、現在進行形の物語である(はじめにより)と指摘する。

メディアの誤報は言うまでもなく、信頼性の失墜につながるにしても、ネット空間の広がりや否応なしに素人の発信機能を広げ、ねつ造、欺きの情報がビジネスとして成立する社会に入り込んでいる。

他方、そうしたネットニュースも大きな信頼性が揺らいでいる。日経新聞記者出身の松林黒『ポスト真実』時代のネットニュースの読み方(『讀文社』)が必ずしもバラ色の未来を解明のヒントを与えてくれ

る。同じく朝日新聞のIT専門記者経験のある平和博『信じてはいけない』(朝日新書)も、偏向する利用者に、監視社会化が進む一方、グローバル社会で国際的な調査報道組織が誕生しており、パナマ文書やパラダイス文書事件で活躍している。その一人である澤康臣の『グローバル・ジャーナリズム』(岩波新書)が苦悶を評述している。加えて花田達朗・別府美奈子・大塚一美・デービッド・E・カフラン『調査報道・ジャーナリズムの挑戦』(旬報社)は市民社会と国際支援戦略の連携、記者養成教育の再構築、「世界で共有され、共鳴しあう専門知」(あとがき、別府)を訴える。

グローバルなニュースの潮流に大きな影響を与えているひとつに通信社がある。世界の通信社研究会編『挑戦する世界の通信社』(新聞通信調査会)はコンパクトに今日的な通信社の動向を、また岩間優希PAN A通信社と戦後日本(人文書院)は日本を取り巻いた情報環境の一幕を、同社に關わった多くのアジア人ジャーナリストのライフヒ

## 吹き荒れる「フェイクニュース」

ねつ造、欺きがビジネスとして成立する社会

鈴木 雄 雅

眼前に翻っている。ストリーから描いている。芋川洋一×佐々木毅(政治家)が動かすメディア(東京大学出版会)は民主政の変質(可能性)にメディア自体があるということに否定的なもの、メディアが蔓延するナショナリズムやポピュリズムの防波堤に

なりうるかという点、既存の澤康臣の『グローバル・ジャーナリズム』(岩波新書)が苦悶を評述している。加えて花田達朗・別府美奈子・大塚一美・デービッド・E・カフラン『調査報道・ジャーナリズムの挑戦』(旬報社)は市民社会と国際支援戦略の連携、記者養成教育の再構築、「世界で共有され、共鳴しあう専門知」(あとがき、別府)を訴える。

グローバルなニュースの潮流に大きな影響を与えているひとつに通信社がある。世界の通信社研究会編『挑戦する世界の通信社』(新聞通信調査会)はコンパクトに今日的な通信社の動向を、また岩間優希PAN A通信社と戦後日本(人文書院)は日本を取り巻いた情報環境の一幕を、同社に關わった多くのアジア人ジャーナリストのライフヒ

ストリーから描いている。芋川洋一×佐々木毅(政治家)が動かすメディア(東京大学出版会)は民主政の変質(可能性)にメディア自体があるということに否定的なもの、メディアが蔓延するナショナリズムやポピュリズムの防波堤に

なりうるかという点、既存の澤康臣の『グローバル・ジャーナリズム』(岩波新書)が苦悶を評述している。加えて花田達朗・別府美奈子・大塚一美・デービッド・E・カフラン『調査報道・ジャーナリズムの挑戦』(旬報社)は市民社会と国際支援戦略の連携、記者養成教育の再構築、「世界で共有され、共鳴しあう専門知」(あとがき、別府)を訴える。

「ポスト・トゥールズ」程に過ぎないとすれば、山を期待したい。腰修三編著『入門メディア・コミュニケーション』(慶應義塾大学出版会)と訳『ウェブに夢見るバカ』(訳者)が何を意味するかの本を読むことにより、適応力がつくユーザーの出現もいれないが、この十年の授・新聞学)めまぐるしいIT社会を再考するきっかけになる。原題「薄気味悪いユーティリティ」(訳者)が何を意味するか評考してもいいだろう。(すずき・ゆうが)上智大学教授・新聞学)